

V 現職教育

1. 現職教育計画方針

石川県教育委員会及び教員総合研修センター、郡市小学校教育課程研修会、公開研究会、校内研究会・研修会など研修の機会を積極的に活用し、自己の研鑽に努める。カリマネの柱を研究の軸とし、各教科においてさらなる授業改善に取り組む。

2. 学校研究

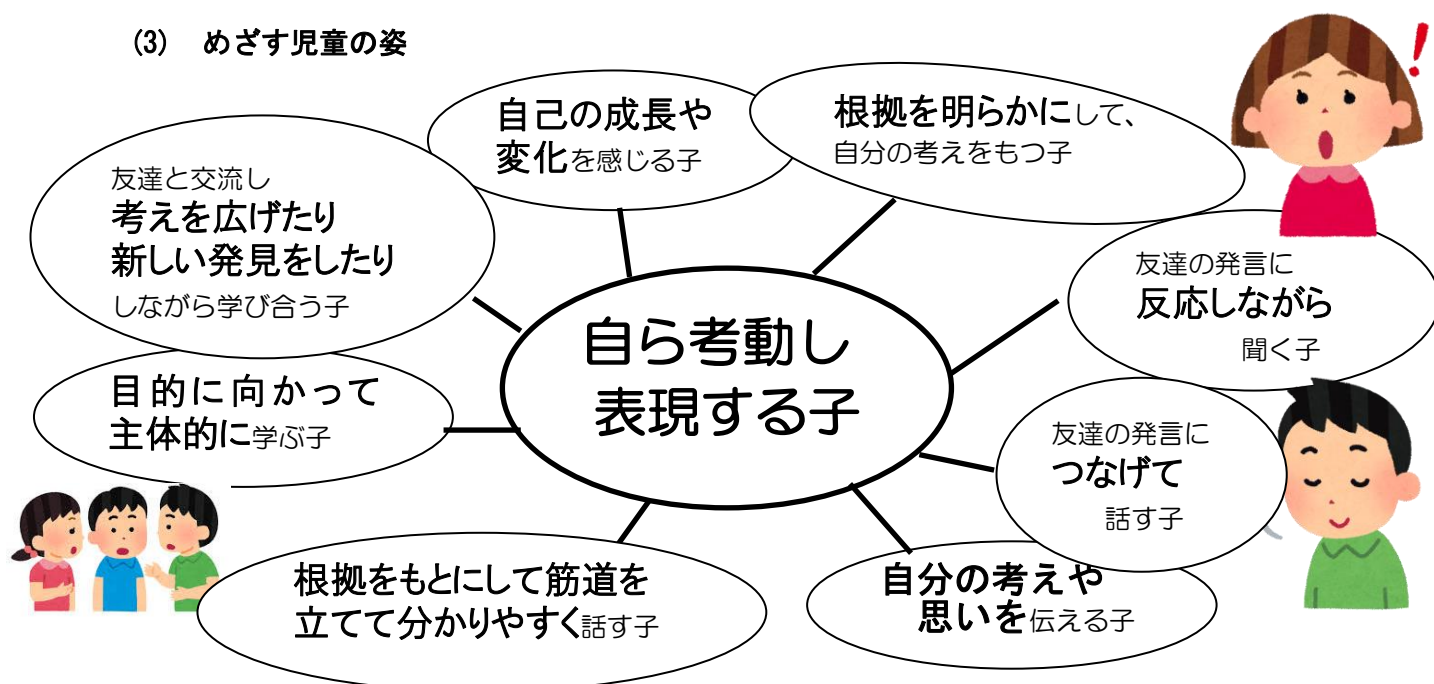
(1) 研究主題・副主題

自ら考動し、表現する子の育成

(2) 設定の理由

本校では、学校教育目標「学びへの意欲をもち、やさしさとたくましさをあわせもったねぶっ子の育成」研究主題「自ら考動し、表現する子の育成」に基づき、児童の心を育て、自らを律し、主体的・協働的に学習する児童を育てることを大切にして、学校研究を進めてきた。また、学力調査の結果等をもとに、各教科における課題を焦点化し、弱点である部分を補いながら児童に付けたい力が身に付くよう授業づくりを行ってきた。しかしその中で、児童が「自ら考動する姿」「自ら表現する姿」のビジョンが多様化し、形や見た目ありきの授業が目立つようになった。児童が、自らの課題を適切に捉え、その課題解決に向けて試行錯誤しながら学びを獲得する姿こそ、主体的・協働的に学ぶ姿であり、その道筋には「教科の本質を捉えた視点」が欠かせない。目的が曖昧なまま複数で話し合うのではなく、課題解決に向けた道筋の中で、「協働的学び」が価値付くよう、教科の本質を捉えた上での単元構想が必要となってくる。能動的な学び手とするための自己決定の場は、その教科で身に付けるべき力と合致しているのかという視点も不可欠である。児童が日々の学習活動で身に付けた力を全ての教育活動につなげ、実践的な力となるようにしていきたい。そこで、今年度も引き続き研究主題を「自ら考動し、表現する子の育成」とし、主体性を育む視点に加え、教科の本質を捉えた授業づくりを基盤とし、自己表現力の育成を目指す。研究の重点を①「自ら進んでゴールに向かうための教師の手立て」と②「児童の自己変容の気づきや教師の見取りの充実」とする。児童自らが課題をつかみ、主体的に学びを進められるように、教科の特性を生かしながら合科的に授業をデザインする。また、どのような道筋でゴールに向かっていくのか、児童自らが自己決定しながら進められるような学習環境を整備し、一斉授業と個別進度のバランスを調整していく。さらに振り返り場面では、単元を通して自らの学びを自覚化するために、視点を明らかにした振り返りを促し、児童の自己評価と教師の見取りの整合性を図ることで、授業改善につなげていく。

(3) めざす児童の姿



(4) 研究の重点

1 自ら進んでゴールに向かうための教師の手立て

- 学習環境の整備
ゴールに向かうために必要な手がかりや、児童の思考が促されるような学びの場を整えることで、より主体的に学習に向かう姿を目指す。
- 自己決定の場の設定
児童がどのような方法でゴールに向かっていくのか、ねらい（付けたい力）をもとに精選し、児童に自己決定の場を与える。
- 協働的な学び
ゴールに向かう過程において、自己調整力を高めるために、児童相互の多様な考えを共有し合う場を与える。
- 軌道修正の場（子供に委ねる場面と一斉授業のバランス）
ゴールに向かう道筋での困り感を拾い上げるとともに、その時々に応じて全体へ返し、理解度や達成度を確認し合う場を設定する。

2 児童の自己変容の気づきや教師の見取りの充実

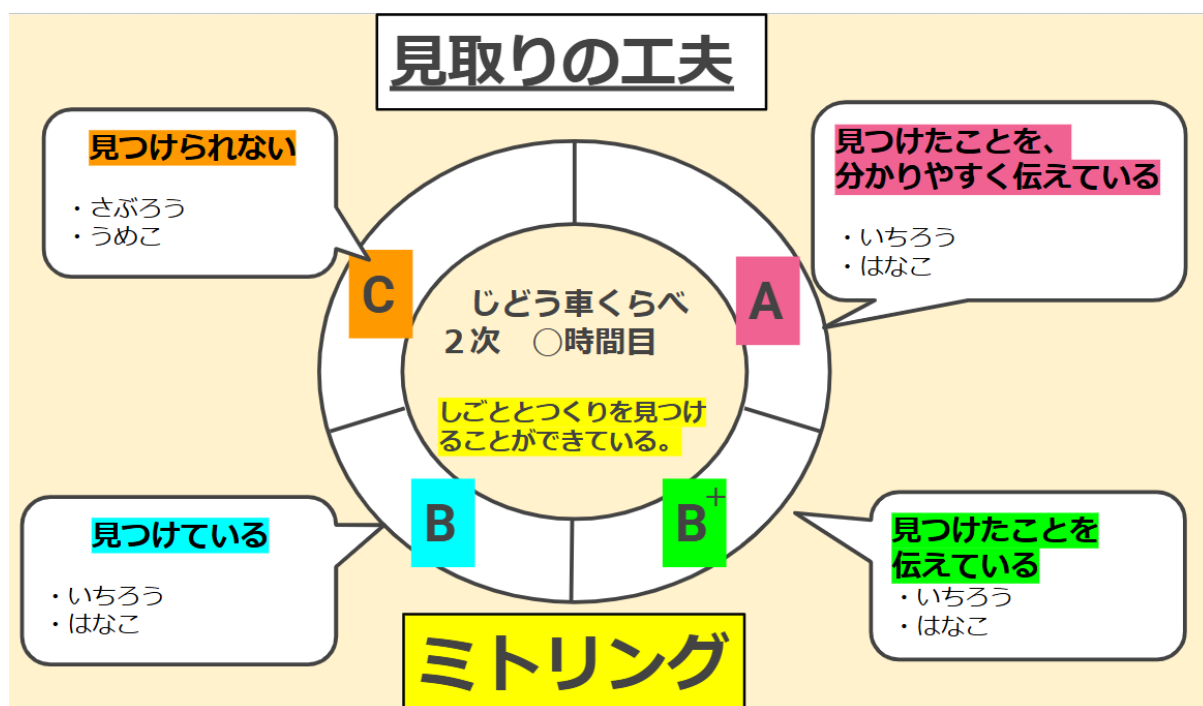
- 振り返りシートを活用し、学習に対する自己の学びの自覚化を促す。

やまなし 振り返りシート

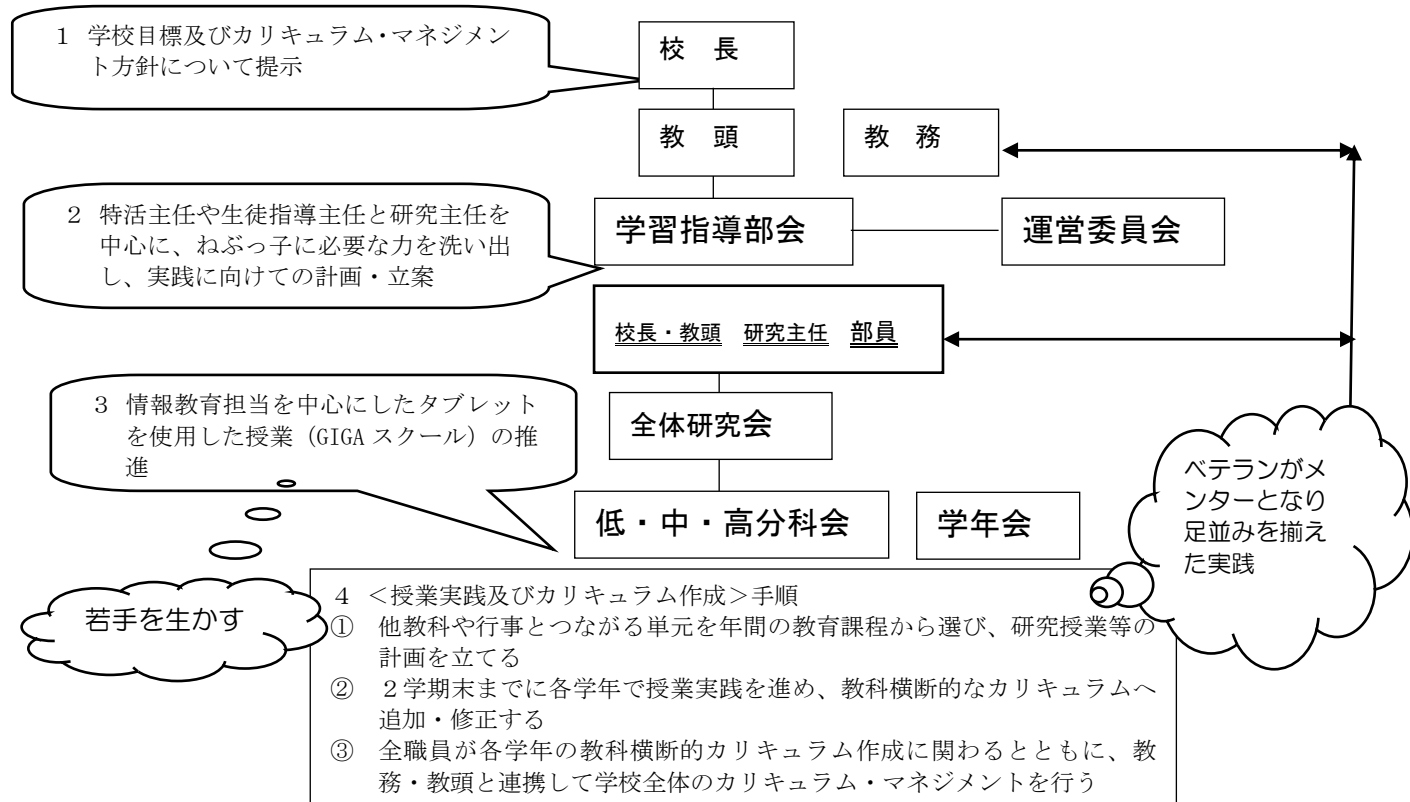
6年()組 名前()

日付	/ ()	/ ()	/ ()	/ ()	/ ()
今日の予定	達成度				
予定の達成度 ABC			学び方について		
考える方法 個人・ペア トリオ・グループ					
振り返り① ・分かったこと ・変わったこと	自己の学びの変容				
振り返り② ・困ったこと ・分からないこと ・次に取り組み たいこと	次時への見通し				

- 見取りシート（ミトリング等）を活用し、児童の実態把握や授業改善に生かす。



(5) 研究の組織



(6) 研究の方法

- ①各部会で研究の重点を具現化するための手立てを考え、実践の中で主題に迫る指導を追究していく。
- ②研究授業を通して、検証を行う。
 - ・年間2回の全体研究授業、1回の提案授業を設定し、共通理解を深めながら研究を進める。提案授業は、次年度を見据えて3学期に行う。全体研以外は、ブロック研として実践する。また、学年共同で授業研究を進め、研究授業を行う。研究授業の教科は問わず、級外も学年に含め、合科的横断的に研究を推進していく。
 - ・研究授業の事前研・授業整理会は各ブロックを中心に行う。授業者は代表者または、合同での実施のどちらかとし、代表者でない学級では、先行実施または改善実施を行い、研究授業とはせず、自由参観とする。所属するブロック以外の研究授業整理会も積極的に参加し、感想を伝え合う。
 - ・全体研究会、ブロック研究会においては積極的に外部講師を招聘し研修を深める。
 - ・全体研究授業の事前研では、指導案検討、模擬授業を行い、全員で授業づくりを考える。重点に沿った授業づくり、付けたい力をつけるための学び方、予想される児童の思考や行動、学習環境、支援のタイミング等について協議検討する。
 - ・授業整理会では、研究主題・重点に沿った協議となるようにし、児童の変容をもとに授業改善に努める。
- ③相互に授業を参観し合い、授業力向上に努める。
- ④外部講師を招聘した研修会を行い、指導力向上を目指す。
- ⑤実践や取組の成果を以下の方法で検証し、よりよい実践に向けて改善を図る。
 - ・学力、学習状況調査
 - ・児童アンケートによる意識調査
 - ・めざす児童の姿と児童の実態の分析
 - ・授業での発言や行動の観察
 - ・児童の振り返りシート、教師の見取り表

(7) 研究主題に迫るための方策

授業力向上に向けた取組

①子供が主体となる授業づくり

①各教科の目標を確認する。→②資質・能力（指導事項）を正しく捉える。→③資質・能力（指導事項）から、授業の終末の姿を具体的にイメージし、その姿にせまるための手立てを考える。→④振り返りシートをもとに振り返りを充実させる。（「主体的に学習に取り組む態度」を評価する視点を与える。）この一連の流れを基本に教材研究を行う。単元で付けたい力をはっきりとさせ、学習過程を掲示し、児童と共に見通しをもって学習を展開する。

②大根布授業スタイル（全教科で）

つかむ→考える（自己解決）
→深める（考えの交流） } まとめる・ふり返る
の4つの学習過程を基に学習に取り組む。
子どもに委ねる場面、自己選択、自己決定の場を設定し、自ら考動し表現しようという姿を目指す。

③授業研究の充実

（ア）模擬授業

全体研究授業の事前研では、指導案検討に加えて、模擬授業を実施する。重点にかかわる手立てなどについて児童の反応を予想しながら問題点を協議する。

（イ）研究授業日の設定

単日で授業を公開するのではなく、子供がいかに変容していくかを見取り、教師の有効な手立てを分析するために、公開日を複数日に設定する。

（ウ）グループワーク授業整理会

ICTを活用し、可視化を図りながら重点ごとに視点を明確にして成果と課題、改善策を協議する。
また、児童の姿を中心に協議をし、授業改善や指導力向上につなげていく。

④授業改善に向けての取組

学期毎に授業改善の目標を立て、週案上の1時間をマーカー授業として位置づけ自己評価し、研究の重点を意識した自己目標の検証を行う。

⑤相互授業参観

日常的な授業研究を進められるように、相互授業参観週間を設定する。児童の学びに対する教師の働きかけや、ゴールに向かう児童同士の協働的な学びの姿、他学年の学習内容や系統性などを知り、教師も児童も互いに学び合える機会とする。

⑥OJTの充実

学年会で教材研究の時間を確保するとともに、日常的に学年の教材研究を大切にしながら、教師の困り感を共有したり、すぐに授業で実践したりできるようにOJTの研修の機会を設ける。若手教職員の要望を反映した、授業力向上・学力向上のための内容などを計画的に実施する。

(8) 学習を支える基盤づくりの取組

①「ねぶっ子 授業の8つのお約束」をもとにした学習規律の徹底

学習の準備、姿勢、話し方、聞き方等、学習規律を8つの項目に焦点化した「授業の8つのお約束」をもとに指導を行う。重点を「話す」「聴く」の2つに絞り、学期ごとに振り返りを行う。

②言語力の育成 「おおねぶワード」「うなずきワード」「つつこみワード」

相手に分かりやすく、相手を説得できるように話すには、根拠を明確にする必要がある。「おおねぶワード」をいつでも意識できるよう全教室に掲示し、友だちの意見につなげる話型や考え・根拠・理由の表現の仕方を示し、相手意識をもった話し合いができるようにする。また、相手の意見をよく聞き、反応を返すことで、自分の立場や感じた思いをすぐに出出できるようにしたい。そのために相手への共感を示す「うなずきワード」や、相手の意見に対しての「つつこみワード」を活用し、話し合いの質の向上を促し、表現する子の素地を養う。

③基礎・基本の定着

(ア) 漢字検定

各学年で習う漢字の習得を、学校全体で徹底して行うために、ねぶっ子漢字検定に取り組む。校長が作成・採点・集計・表彰を行い、全学年共通で取り組む。また、「早寝・早起き・家庭学習」の取組とタイアップすることで、家庭と連携して行う。

(イ) 朝学習

朝学習は、基礎・基本の定着に繋がる大切な時間と捉え、15分間集中して学習することを徹底する。月曜日・木曜日・金曜日は漢字や計算に取り組み、火曜日は全校読書、水曜日は、「長文に慣れること」、「時事的な問題に興味を持たせること」、「語彙力アップ」、「問いに正対する解答の仕方の定着」をねらい、読みチャレと視写に取り組む。また、月に1回、自己表出・自己表現力を高める時間として「ねぶっこトーク」を設定する。お題に対してトリオトーク、ペアトーク等形態を変えながら、相手に自分の考えたことや思ったことを伝えられるようにし、聞き手は反応しながら質問したり感想を伝えたりし、双方向のやり取りができることを目指す。

(ウ) パワーアップタイム

長文読解や弱点克服のため、11月と2月、3月をパワーアップ月間として、3・4・5年を中心に活用問題に取り組む時間を設定する。

(エ) 家庭学習の習慣化

年度当初、家庭と児童向けに「家庭学習のてびき」を配付する。児童には家庭学習の取り組み方や内容の参考にさせ、保護者に対しては協力を依頼し家庭での支援に活かしてもらう。家庭でも主体的に学習する力の定着を目指して、児童が自ら学びを調整しながら計画的に進められるようにサポートをしていく。

④読書活動の推進

読書量を増やすために学年ごとに冊数目標を設定したり、読書の幅を広げるために読んでほしい本を必読書として選定したりする。国語科の授業でも、並行読書を進めたり、調べ活動で図書館利用の機会を増やしたりするなど、授業とのつながりも工夫する。さらに、週1回の朝読書、図書ボランティアや教師、英語指導員による読み聞かせなども行い、読書に関する関心を喚起する。読んだ本の履歴がわかる「読書カード」も活用しながら、読書の質を高めていくと共に、4月23日のいしかわ学校読書の日に合わせて、毎月家庭読書の日を位置付け、家庭での読書習慣も推進していく。

(9) 研究の構想図

